

第29回全国読書作文コンクール対象図書

【小学生の部】

図書名 ふたりはとっても本がすき！

如月 かずさ 著 定価1188円(税込) 小峰書店



せっかちなチーターのチッタちゃん と のんびり屋のカバのヒポくんは、本が大好き。でも、読み方がちよつと違います。チッタちゃんは、はやく、たくさん読むし、ヒポくんは、ゆっくりじっくり読みます。ある日、チッタちゃんは図書館で、自分が読んだことのある本を借りているヒポくんに出会います。後日、ヒポくんから、本の感想を語り合いたいといわれますが、チッタちゃんは感想をいえません。ヒポくんはお気に入りの文章を暗唱するのでした。チッタちゃんは、「たくさんの本を読んでも感想がいえないと意味がないんじゃないか」と落ち込んでしまいます。そんなふたりは、夏休みの宿題で読書感想文を書くこととなります。感想文を書ける気がしないチッタちゃんが暗い気持ちのまま図書館にいくと、ため息をついているヒポくんに出会うのでした。ヒポくんは困っているといいますが…。正反対のふたりが本を通して友情を深める物語。

図書名 明日のランチはきみと

サラ・ウィークス／ギター・ヴァラダラージャン 著 定価1512円(税込) フレーベル館



インドからアメリカへ転校してきた自信家のラビと、自信がなく消極的なジョー。同じクラスの一週間の出来事を、対極的なふたりの少年の視点から描きます。インド人であるラビは、自分は何んでもできる優秀な生徒だと思っていました。そのため、アメリカの小学校で英語の間違いを指摘されても、なかなか受け入れられません。同級生がからかって笑っていても、「好かれている」とかんちがいきます。

一方、ラビの後ろの席のジョーは、脳に障害があり、さわがしいことが苦手。自分は何にもできないだと、目立たないように過ごしています。その分、周りをよく観察して、どんな人なのかを正確に見抜く目を持っています。

ちがう国で育った、性格も正反対のふたりの少年が交流することで、自分の欠点や長所に気づき、逆境を乗り越えていく、爽快な成長物語です。

図書名 シャイローがきた夏

フィリス・レイノルズ・ネイラー 著 定価1404円(税込) あすなる書房

子犬との出会いをきっかけに、成長していく少年の姿を描いたさわやかな物語です。

ある夏の日、11歳の少年マーティは、散歩の途中で、やせて、おどおとしたビーグルの子犬に出会います。マーティは、「シャイロー」と名づけたその子犬を飼いたいと、強く願うのですが、家計は苦しく、ペットを飼うことは許されません。家の事情はわかっているものの、シャイローのことが忘れられないマーティは、秘密の場所でこっそり世話をしはじめますが、シャイローを守るためには、つきたくもない嘘をつかなくてはならなくなったりして、さまざまな困難がつきまといます。それまで大人のいうことに疑問をもったことのなかったマーティは、本当に「正しいこと」とは何だろう？と考えはじめます。

本国アメリカでの評価も高く、ニューベリー賞を受賞しています。ひと夏の少年の成長を、あざやかに描いた物語です。



【小学生・中学生の部共通】

図書名 クジラのおなかからプラスチック

保坂 直紀 著 定価 1512円(税込) 旬報社



地球温暖化にならぶ環境問題として、いま世界が注目しているのが海洋プラスチック汚染です。捨てられるプラスチックごみは、このままでは2050年に海の魚の重量を超えてしまうといわれ、大量のレジ袋をクジラや海ガメなどの海洋生物が飲み込んで死亡する痛ましい事故が世界中で起きています。

プラスチックは自然界では永遠に分解されません。そのため、細かく砕けた「マイクロプラスチック」が食物連鎖の中で人体にも取り込まれ、健康への影響も懸念されています。海洋国・日本の海は世界でもとくにプラスチックごみが集まりやすいとされています。科学ジャーナリストが、プラスチックという物質の基本知識を解説しながら、驚くべきプラスチック汚染の実態を明らかにしていきます。この問題に私たちはどう向き合っていくべきか。未来へのヒントが見つかった1冊です。

図書名 子ども食堂 かみふうせん

齊藤 飛鳥 著 定価 1620円(税込) 国土社



街角でポスターを見た瞬間、麻耶はビビッときた。「子ども食堂かみふうせん」。手作り感満載のポスターにはそう書かれていた。昼ご飯はトン汁とおむすび、夜ご飯はカレーライスとサラダだけ。どちらも百円で食べられる子どものための食堂だという。さっそくウキで向かった麻耶を温かく迎えてくれたのは、子ども食堂を運営する「あーさん」。あーさんは、マスカットをふるまってくれたり、子ども食堂のことを教えてくれたり、とても親切だ。年下の子どもたちに得意の折り紙を披露したり、一緒にご飯を食べたり、麻耶はすっかり子ども食堂になじんでいた。ところが、帰り際のあーさんの質問によって、麻耶の物語は一変する……。

ほかに、顔も頭も運動神経も良い人気者の闘志、なにごとくも地味で目立たない女の子の悠乃、時代劇と家族をこよなく愛する一平。子ども食堂かみふうせんで出会った4人の孤食な小学生が希望の物語をつむぐ、孤食がテーマのオムニバスストーリー。

図書名 ローズさん

澤井 美穂 著 定価1512円(税込) フレーベル館



中学2年生の惟は母から逃れるため、祖母の暮らす北の街へやってきた。将来、有望なピアニストに育てたい母と自分の意見を尊重してもらいたい惟の間に深い溝ができたためだった。

放課後、だれにも知られずに、転校した学校の音楽室でピアノを奏でるのが惟のなぐさめだった。ある日、幸志郎という同級生が訪れ、自分もこっそり音楽室でピアノを弾いていたと打ち明ける。しだいに幸志郎と親しくなっていく惟。また、総合学習の授業でグループ発表するため、惟の班では都市伝説として町に伝わる「ローズさんの呪い」を調べることに。惟は文学館の学芸員、ちはやさんと草刈さんに協力してもらい、ローズさんの物語を集めていく。人見知りな惟にとって、取材は苦手だったが、幸志郎の助けもあり、ローズさんの真相に近づいていく。そしてすべての謎がとけたとき、惟は自立して本格的にピアノに取り組むことを決意する。幸志郎との最後の連弾を味わいながら…。

図書名 クロノドッグ

今西 乃子 著 定価1404円(税込) 金の星社



友だちもなくいじめられている航（わたる）の支えは、飼い犬の希（のぞみ）だけでした。希は、虐待を受け後ろ足が切断されていましたが、不思議な包容力があり、やがて航に友人も与えてくれます。希の存在が大きくなるほど、足のある希の姿を見たいと切望する航。自由研究で元の生き物とそっくりに蘇らせるクローンという技術があることを知り…。

「犬たちをおくる日」「光をくれた犬たち」など取材を重ねて多くのノンフィクション作品を書いてきた作者が、その取材の中で出会ったクローンという技術。人間のエゴのために先端技術が使われた時、いったい何が生まれるのでしょうか？いったい何が「命」をつくるのでしょうか？「命」とはなにか、「個性」とはなにかを考えさせられる力作です。

【中学生の部】

図書名 変化球男子

M・G・ヘネシー 著 定価1728円(税込) 鈴木出版

主人公は、6年生のシエン。女の子の体で生まれましたが、3歳のときに自分は男の子だと自覚し、家族に告げます。お母さんは、性同一性障害のことを勉強してシエンを全力で支えますが、お父さんはちゃんと向き合おうとしません。シエンは引越しいよる転校を機に、男子として通学しはじめます。絵を描くのが大好きで、長編マンガを創作中。野球に熱中し、最高に気の合う親友もでき、気になる女子もいて、充実した毎日を送っていました。でも、親友にも言えない大きな秘密を抱えていることに悩んでもいました。ある日、敵チームの選手に、シエンが女子だったころの写真をメー



ルで拡散されてしまいます。陰口やいやがらせが始まり、学校にも野球の練習にも行けなくなってしまうシーン。この危機を乗り越えるために力になってくれたのは、家族と友だちとチームメートでした。ジェンダーアイデンティティをテーマにした、さわやかな青春ドラマです。

図書名 ぼくたちのP (パラダイス)

にしがき ようこ 著 定価 1512円(税込) 小学館



主人公の少年ユウタは、人には言えない弱点を持っていた。そのせいで、ちょっと人が苦手で、あまり友だちがいない。そんなある夏休み、伯父さんの別荘に行くことになった。でも、そこは別荘という響きから想像していたのとはぜんぜん違っていった。5時間ものきつい山登りの末にたどりついたのは、電気も通ってない、本当に何も無い山小屋だったのだ。伯父さんは、大学の先生で、山の保全について研究している。この山で、伯父さんは、生徒たちとフィールドワークしていた。山で出会った若者たちの、どろどろになりながら作業をしている姿が、あまりに楽しそうで、ユウタもつい引き込まれてしまう。最初は、こんなはずじゃなかったと、さめていたのだが、山での生活で、少しずつ変化していく。一緒に作業するうちに、自分の居場所を見つけていった。何がユウタを変

えたのか？ ユウタは弱点を乗り越えられるのか？

不自由な山小屋での予想を超えた体験物語。

図書名 レモンの図書室

ジョー・コットリル 著 定価1620円(税込) 小学館

ママが死んでしまったから、パパと二人で暮らしているカリブソは、本が大好きな10歳の女の子。

いつも一人でいるカリブソにとって、本はたったひとつの心のよりどころだった。本は、頭の中に安らぎの場所を作ってく



れ、そこに広がる魔法や、無人島や謎に満ちた世界が、カリブソは大好きだった。「強い心を持たなくてはいけない」とパパが言うから、

何があっても、カリブソは、「わたしはだいじょうぶ」自分にそう言い聞かせ絶対に泣かないようにしていた。本は、勇気づけてくれるし、世界を広げてくれるし、友だちにだってなれるかもしれない。しかし、本だけでは、心は満たされない。そんなカリブソの心を開いたのは何だったのか？

やがて、カリブソは、自分の物語を紡ぎはじめる。ヤングケアラーの問題を扱った家族の再生の物語。現代の抱える問題を扱いながらも、子どもの気持ちにより添った物語は、多くの人たちから共感が寄せられている。